令和５年度第２回諫早市認知症対策推進会議要旨

1. 日時：令和５年 10 月 31 日（火）　19：00～20：40
2. 場所：健康福祉センター　２階　第一研修室
3. 協議内容

１．報告

（１）認知症多職種協働研修について

【動画視聴期間】令和５年８月１７日～令和５年１０月２０日

【動画再生回数】８２１回（パート１：３６３回、パート２：２４２回、パート３：２１６回）

【申込者数】　　２７５人（機関はグループホーム、職種は介護福祉士が最多）

・認知症の実行機能障害について、調理や服薬など場面ごとの支援のポイントを専門職同士で共有

・アンケートでは研修構成について７割以上が「良かった」、９割以上が「応用編として妥当」だと回答

委員：オンデマンド配信を視聴したが、４コマ漫画が楽しく分かりやすく、住民向けアプローチに良いと思った。認知症疾患医療センターの視聴者が３人でアンケート回答０人となっているが、一番専門機関でもあるため、配信のＰＲやアドバイザーとしての参加など促して良いのでは。

事務局：　認知症疾患医療センターにも周知は行っているが、参画してもらうことも含め検討したい。

（２）認知症の普及啓発について

・令和３年度に作成した認知症４コマ漫画を動画化し、市公式 youtube への掲載や認知症サポーター養成講座でも活用している。

・世界アルツハイマー月間（９月）で、眼鏡橋のライトアップや駅での認知症パネル展、図書館での特設コーナー設置などに取り組んだ。

委員：認知症ケアパスの配布状況について、どういった所でよく配布されているか。

事務局：　郵便局や銀行からはコンスタントに補充連絡がある。最近は歯科医院も多い。令和４年度は約２万８０００部ほど設置および配布した。

委員：アルツハイマー月間での街頭活動で、鎮西大学の学生も参加していることが良いと思うが、学生からの反応はどうか。

事務局：チラシの配布活動後に認知症サポーター養成講座も受講してもらったが、どの講座より質問も多く、自分の祖父母について気になるので相談したい、と個別に相談する事例もあった。次年度も講座および街頭活動を継続予定。

委員：たらみ図書館で開催された認知症講演会に自分も参加し、大変勉強になった。講演会の機会が増えたらよい。

（３）オレンジセーフティネットの導入について

・事務局から仕組みの説明と、前回会議で共有された意見や課題などを整理・報告した。

委員：対象は市内だけか。保護対象が市境を越えてしまった場合の対応は。

事務局： 市内在住者だけでなく、市外在住者も捜索協力者として登録する仕組みを検討したい。

委員：市において、認知症により行方不明になって発見された事例は多いのか。

事務局:令和４年度、諫早警察署によって取り扱われた認知症による行方不明者は２９名。全員無事発見されたかは不明。

２．議事

（１）認知症に関する施策の振り返り

・事務局から認知症施策の取り組みについて説明し、現状での課題や市として力を入れるべき分野などについて、情報共有、意見交換**【後述】**を行った。

委員：認知症初期集中支援チームを医療機関に委託とは、具体的にどういうことか。

事務局：委託先のあきやま病院の介護・医療の専門職および認知症専門医が、医療や介護に繋がらない事例の相談対応や訪問などを行っており、市も毎月チーム員会議に参加している。課の認知症地域支援推進員も市の相談窓口として初期集中支援チームと連携し、情報共有を行っている。

委員：がん教育という文科省が取り入れているカリキュラムがあるが、認知症でも学校教育に取り入れている事例があるか。

事務局：明峰中学校では授業で認知症サポーター養成講座を行っている。真崎小学校では総合の授業で少子高齢化の問題を取り上げたいということで、認知症と介護予防などの話をした。

【意見交換での主な意見】

・普及啓発ツールの４コマ漫画がとても良かったが、まだ内容が知られていない。普及啓発の方法としてラジオなどを使っているとのことだが、世代によって受け取りやすい情報源も異なるので、告知に力を入れないと一般の人には広がらない。

・オレンジ手帳などのツールを使わなくとも、「自分が認知症になったらどうするか」という話を職場や家庭など身近な単位で話せる時間を持てればよい。

・認知症の患者本人や家族に対する偏見を感じる機会はあまりない。家族も隠すことなく、認知症の症状が出ても地域の中で「心配だね、今度顔を見に行こうか」と自然な見守りが出来ていることもある。

・講演会など市が取り組んでいる様々な事業も、必要な人に届いていないことが課題。

・講演会は参加してとても良かったので、各地域でやってほしい。

・自分で情報を取りにいかない人、情報を知る人が誘っても行かない人をへどうアプローチするか。男性なら役割を与えたり責任が発生すると地域活動に参加するきっかけになるのでは。

・発信の強化も必要だが、情報を受け取る側が興味を持つためには学校教育に力を入れたら良いのでは。認知症のことを当たり前に知ってもらうことで、情報が入ってきても受け取れるのではないか。

・小中学生に普及啓発するためには学校の先生や校長へアプローチすることが必要。

・認知症になったことを周囲の人に言える諫早市にならないといけない。

・小学生の夏休みの学童で認知症関連のイベントをやったり、ＳＯＳ模擬訓練の子供版をやったり、楽しみながら認知症について学べる機会があれば良い。